

[研究論文]

質料的想像力とナルシシズム

— バシュラルの質料的想像力研究 —

北 村 知 之

1. 問題設定 水の質料的イメージ

バシュラルの『水と夢』は、彼がその質料的想像力（l'imagination matérielle）という概念を世に訴えた著作であり、バシュラル自身が「全編にわたって、おそらくうんざりするほど、質料的想像力の諸テーマを強調することを決まりとして自らに課する」(ER22)¹⁾と述べているとおり、同書の主題が質料的想像力もしくは質料的イメージであることはあらためて言うまでもないことであろう。同書は、その意味で、質料的想像力についての美学的著作として読むべきものである。しかしこのことは、同書において質料的想像力の何たるかが明快に示されているということを意味するものではないということも付言しておかなければならない。そもそも質料的想像力の概念は、四元素説と対応するものであり、それゆえ地水火風のすべてに対して質料的想像力が認められべきものである。そしてバシュラルはそれぞれの元素を主題とした著作をものしているのである。そのうちで水を主題にしたものが『水と夢』である。『水と夢』は、「水を巡る様々な文学的イメージを数え上げ²⁾」、「水にかかわりのある詩的夢想や映像を網羅的に蒐集し、分析³⁾」した著作であり、水のイメージについての博物誌的評論としても読むことができる。そしてその評論それ自体が文学作品として読むことのできる文章であり、「いまや青い水の天体に住む人類と水とのかかわりを、時間や歴史、人種の差別を超えて、もっぱら普遍的な詩的経験として示した二十世紀からの報告書」として読まれもするのである⁴⁾。

『水と夢』はそのように文学的にも魅力的な著作であるが、本稿は、それが質料的想像力についての理論書であるという側面から、質料的想像力もしくは質料的イメージの意味するところについてのより理論的な理解を求めて同書にアプローチするものである。

『水と夢』においては、全編にわたって質料的想像力の諸テーマが強調されているのであるが、序論においてこそ質料的想像力と形相的想像力（l'imagination formelle）を対立させる図式が提示され、最低限の理論的枠組みが示されるものの、それ以上に質料的想像力についての理論的説明がなされているわけではない。それは序論に続く本篇において展開されるべきものであるが、しかし本篇においてわれわれが読むことになるのは、水に関わる文学的イメージの具

受付日 2012. 5. 1

受理日 2012. 7. 11

所 属 学術教養センター

体的事例とそれぞれについてのバシュラールの考察である。つまり、そこで論じられている水のイメージは水の質料的イメージなのであるが、バシュラールは其中で質料的イメージの一般化を必ずしも明示的に行っているとは言い難いのである。質料的イメージとは何か、という問いに対する端的な答は示されていないのである。

『水と夢』についてのこのような認識から、この問題に関しては、いったん『水と夢』から離れて掘め手からアプローチすることによって質料的想像力の枠組みを捉えることをかつて試みた⁵⁾。そしてわれわれは、同時期のバシュラールの科学的認識論を質料的想像力の理論と照合することによって、質料的イメージがバシュラールの科学的認識論における認識論的障害と重なるものであると考えたのである。『科学的精神の形成』においてバシュラールは、合理的な科学的認識を阻むものとして、さまざまな原因を指摘していた。それらはいずれも合理的な吟味を経ることなく表象されたイメージであって、要するに想像力の産物と見なすことができるものであった。といっても、そこで問題とされる想像力とは、合理的な吟味が容易には届かない精神の深奥部に発するものであり、精神の自由な戯れとして理解されるような想像力とは一線を画するものである。それは想像の対象を実体化し、容易にアニミズムを受け入れる想像力である。科学的認識にとっては障害となるそのような想像力が文学的イメージの産出力として積極的に評価される時、それは質料的想像力として捉えなおされ、その対象は質料的イメージと称されることになるのである。『水と夢』はそのような想像力とイメージについての著作として位置づけられるものである。

バシュラールのイメージ論は、このように彼の科学的認識論の枠組みと照合することによって一定の理解を得ることはできたと思われるが、しかしそれは質料的想像力について外側からその輪郭を描いただけであって、あくまで科学的認識論の文脈において解釈したというにすぎない。バシュラールの四元素に関わるイメージ論が、本来的には詩的イメージ論であり、美学的芸術学的なものであるならば、そしてバシュラール自身がそのようなものとして提唱しているのであれば、そのイメージ論や想像力論は、あらためて美学の文脈において捉えなおされなければならない。質料的イメージの議論を美学の問題としてより意義あるものとするためには、質料的イメージの美的特徴やその美的意味が明らかにされる必要があるのである。

本稿では、以上のような問題意識の下、質料的イメージおよび質料的想像力についてもっと内部に踏み込んだ理解を得るために、『水と夢』にあらためてアプローチを試みる。その際、われわれが注目するのは、水の表面的イメージとして論じられるいくつかの事例である。後で明らかにするように、水の表面的イメージとは形相的イメージとみなされるものであるが、表面的イメージすべてが形相的とされるわけではない。表面的イメージの中には質料的想像力を活動させるものがあり、バシュラールが同書で取り上げているのはそのような事例である。形相的イメージとみなされる表面的イメージが質料性を帯びてゆく過程およびその論理を追うこ

とによって、バシュラールの言う質料性なるものが如何なるものであるか、いかなる含意を持つものであるかが見えてくることをわれわれは期待するのである。

2. 表面的イメージ

さて、既にここまでで「形相的イメージ」や「質料的イメージ」という語を用いてきたが、改めて確認しておきたいことは、水についてのイメージであればそのすべてが水の質料的イメージだというわけではないということである。水という物質のイメージといっても、それには形相的イメージと質料的イメージがあるというのがバシュラールの議論の前提である。またさらには水の「力動的イメージ」についてもバシュラールは語ることになる。しかしわれわれの当面の関心は質料的イメージにあり、その質料的イメージを限定するためには、まずはそれと対になる形相的イメージがいかなるものであるかを限定できなければならないだろう。両者は典型的な対概念であって、相互的にその性質が限定されるべきものである。

バシュラールは、質料的イメージについて論じるに当たって、まず水の表面的なイメージからアプローチする。表面的イメージとは何かについてバシュラールは次のように述べている。

「質料化する想像力の軸が何であるかをしっかりと示すために、うまく質料化できない (*qui matérialisent mal*) イメージから始めることにしよう。われわれが注目するのは、表面的なイメージ (*des images superficielles*) であり、元素の表面で戯れるイメージである。それは、想像力が質料に働きかける時間を与えてくれないのだ。われわれが最初の章で扱うのは明るい水や輝く水であり、そのような水がもたらすのは軽やかに逃げてゆくイメージである。」(ER15)

ここでは、表面的なイメージが質料的イメージではないということが示されている。少なくとも表面的イメージが質料的イメージの典型でないということは読み取れよう。水の表面的イメージとは、うまく質料化できないイメージなのである。それは水という元素の表面で戯れるイメージであり、変化に富んだものであり、そのために質料的想像力が働く余地がないとみなされるのである。そしてそのような表面的イメージとは、より具体的には、明るい水や輝く水のことである。明るい水や輝く水というのは、水という元素の表面で戯れるイメージのことなのである。

こうした表面で戯れるという性質については、別の箇所に次のような文章がある。

「詩人や夢想家たちは、たいてい、水の表面的な戯れに魅入られるというよりは、水の戯れを楽しむものなのである。そこでは、水は、彼らの風景を飾る装飾にすぎない。水は、ほんとうに彼らの夢想の「実体 (*substance*)」にはなっていないのだ。哲学者風に言うならば、水の詩人たちは、火や土の呼び声に耳を傾ける詩人に比べて、自然の水性的実在 (*la réalité aquatique de la nature*) を「分有する (*par-*

ticiper)」ことが少ないのである。」(ER7-8)

ここでも、水の表面的な戯れが風景の装飾にすぎず、実体となっていないと指摘されている。先の引用に見るように、表面で戯れる水のイメージは、質料化していない水である。それがこの引用部においては、夢想の「実体」になっていないと言い換えられている。「実体」という語が「質料」と同義的に用いられているということを、まずは確認しておきたい。

表面的イメージが質料的イメージではないということは、上記の引用文において確認できよう。さらにそこから表面的イメージは形相的イメージであるということも自明であるように思われるが、それについてもテキストに照らして確認しておこう。そのことは、同じページに次のような文章が出てくることから、それと確認することができる。

「もし読者に、水の表面的イメージの下には、だんだんと深くなり、ますます粘性を帯びてゆく一連のイメージがあることを納得してもらえらば、早晚読者は、自らの観照経験において、この深化 (approfondissement) に共感することになる。読者は、形相の想像力の下に、実体の想像力が開けてくるのを感じるようになるのだ。」(ER8)

ここでは、表面的イメージの下にそれとは別種の深く粘り気をもったイメージが存在することが語られているが、それと同時に、その二種のイメージがそれぞれ「形相の想像力 (l'imagination des formes)」と「実体の想像力 (l'imagination des substances)」とに対応することが指摘されている。「実体の想像力」が「質料的想像力」の謂であることは言うまでもない。表面的イメージとその下の深いところに存在するイメージにそれぞれ対応するのが形相的想像力と質料的想像力なのである。つまり表面的イメージは形相的想像力に対応するものであり、したがって表面的イメージとは形相的イメージに他ならない。

また表面的イメージについてのより具体的な例として明るい水や輝く水が挙げられたが、これについてバシュラールは次のように書いている。

「水は、観照が深まってゆくにつれてだんだんと、物質化する想像力の元素 (un élément de l'imagination matérialisante) となってゆくのだ。換言すれば、楽しむ詩人たちは、一年生の水のように生きている。すなわちそれは春から冬へ移りゆく水であり、あらゆる季節をたやすく受動的に軽やかに反映する水である。しかしもっと深い詩人が見つけるのは、生命力のある多年生の水であり、自分の中から再生する水であり、変化しない水であり、……」(ER16)

きわめて文学的でレトリカルな表現ではあるが、明るい水や輝く水の表面で戯れるイメージが、「あらゆる季節をたやすく受動的に軽やかに反映する水のこと」だと言われている。ここで注目しておくべきは、反映する (réfléter) という言葉が用いられていることである。それは水の表面に映った映像を想起すべき言葉であり、水の表面的イメージの何たるかを端的に示す

ものなのである。

3. 質料的イメージの基本的性質

水についての形相的イメージと質料的イメージがそれぞれ表面的イメージと深層的イメージとに対応させられるということは以上において確認されたわけであるが、ここまでの段階で、水の質料的イメージの諸性質のいくつかが既に指摘されている。それらをまず確認しておこう。

水の質料的イメージとは、既に指摘したように、何よりもまず実体と言い換えられるものである。そしてその第一の特徴は、それが水の深層的イメージであるということから、深さという性質を伴うということである。それは容易に変化しないという性質を備えており、その性質がレトリカルな言い回しで「粘性」と言われ「多年生」と言われ「自分の中から再生する」と言われるのである。要するに、水のイメージは、表面においては様々に変化することがあっても、深いところで変化することなく同一性を保ち続けるという特質を備えており、それが水の質料的イメージを成すものとされているのである。ここで指摘されている性質、すなわち深さや不変性は、質料的イメージを特徴付ける最も基本的な性質である。これは、質料性が実体性と重なるものであるならば、むしろ当然なことと言えよう。

深さや不変性という特徴と並んで質料的イメージの重要な性質として指摘されるのが内奥性である。

「読者は、水の中に、水という実体の中に、一種の内奥性、すなわち火や石の「深さ」が想起させる内奥性とはまったく異なる内奥性を認めることだろう。」(ER8)

ここで内奥性と訳した原語は、*intimité* であり、内密性とも訳されたりする語である。この概念は、バシュラールが質料的イメージを語る時に繰り返すものであり、質料的イメージにとってきわめて基本的な性質である。それは内部を意味するものであるが、単なる空間的な位置関係を表すものではなく、人間の精神が内部であるという時の意味も込められている。したがってそこには、内部としての人間の精神（むしろ魂）と共通する生命的な性質も含意されているのである。そしてこの内奥性と深さとは一体のものである。実体の内部に入ってゆくこと、それはまた実体の奥深く、深部に入ってゆくこともまた意味しているのである。われわれはここで、バシュラールが『科学的精神の形成』において論じた実体概念が内部性を有するものであったことを想起すべきであろう。

バシュラールによれば、そもそも水のイメージは質料化しにくいものである。そのことは、水のイメージを火や大地という元素のイメージと比較することによって、指摘されている (ER7)。

「水がきっかけとなったり、質料となったりしている「イメージ」には、大地や水晶や金属や宝石によってもたらされるイメージにおける恒常性 (*constance*) や堅固さ (*solidité*) がない。それは、火のイメージに見られる活発な生命 (*la vie*

4. ナルシシズムという問題

さて上記のように表面と深部とを対置するという枠組みを提示した上で、バシュラールは、その深部の価値を理解するためには表面について研究が必要であるとし、ナルシシズムや白鳥コンプレックスについての問題提起を行うのである。バシュラールによれば、表面的な諸イメージには、それらを一つのものとする凝集原理（*principes de cohésion*）があつて、それによって表面的イメージが統一的に理解されるのであり（ER16）、そうした凝集原理としてナルシシズムや白鳥コンプレックスが指摘されるのである。ナルシシズムや白鳥コンプレックスは、水における表面的なイメージの事例でありながらも質料的イメージとしての側面を持つもの、もしくは質料的イメージへと深化するものとして取り上げられているのである。われわれは、こうした表面的イメージが質料的想像力論の文脈において論じられる様を検討することによって、質料的イメージないし質料的想像力の意味について理解を深められると考えるのである。

表面的な水のイメージを論じるに際してバシュラールが最初に取り上げるのがナルシシズムである。何故、ナルシシズムがここで問題とされるのだろうか。

例えば、及川は、「バシュラールのナルシシ論は、水に反映するイマージュの実体化の試みとして読むことができるであろう」と解釈し、さらに続けて、「自己のイマージュを所有したいというナルシスの欲求は、水の表面が反映するイマージュを一種の実体とみなすために生じるのであろうし、その不可能な企ては、当然のことながら水の表面にのみとどまることはないからである」と述べている。つまり、水の表面に映ったイメージが、単なる表面でしかない反射像としてではなく、想像力を刺激して、その向こう側にそのイメージの本体が存在していると想像させるということに注目しているのである。

既に言及したように、等しく水のイメージと言っても、形相的イメージが戯れる表面的イメージと質料的イメージが現れる深部のイメージとでは、とりわけ詩的イメージないし美的イメージとしては、まったく評価が異なるものである。ナルシシズムは、表面的イメージの例として取り上げられるのであるが、しかしそれは単なる形相的イメージとしてではない。表面的イメージがいかにして深くなり質料的となるかという事例として取り上げられるのである。

この問題に関連してバシュラールは感覚的価値（*valeurs sensibles*）と官能的価値（*valeurs sensuelles*）とを区別している。そして質料性は官能的なものの側に属するとみなすのである。感覚的価値から官能的価値に移行する時、それは単なる移行ではなく深化なのであるが、その深化によって表面的ポエジーが深いポエジーへと変わる、すなわちイメージが質料化すると考えられているのである。この移行、すなわち感覚的なものから官能的なものへの深化をたどるために、バシュラールは「だから感覚の中でもっとも官能的でないもの、すなわち視覚から始めて、それがどのようにして官能的なものになるかを見よう（ER31）」と言うのである。こうした文脈において取り上げられるのが、ナルシシズムの問題なのである。

vigoureuse) も持っていない。』(ER29)

水という元素と他の元素とのこうした比較は、バシュラールが質料的イメージを一般的にどのようなものと見なしているかを理解する上で、有益であろう。この引用においては、水のイメージに欠けていて大地や火のイメージには容易に見出される特徴が挙げられているが、ここで土や火のイメージに帰属させられた特徴は、エレメントが持つ一般的性質つまり質料的イメージの一般的性質だと考えられる。大地的イメージに当てられている「恒常性」や「堅固さ」という特徴は、変化することのないある固有の性質を質料的イメージが持っているということ、その不変性のことに他ならないし、また火のイメージにおける「活発な生命」も質料的イメージのアニミズム的性質を意味しており、内奥性に通じるものである。ところで、引用文からは、こうした質料的イメージの特徴が水のイメージには欠けているとバシュラールが考えているかのように思われるかもしれないが、しかしそのような解釈は一面的にすぎよう。この指摘は、あくまでも多くの水のイメージについて、それももっぱら水の表面的イメージが念頭に置かれての発言だと解されなければならない。実際、バシュラールは、水のイメージが移ろいやすいものであることを指摘するものの、質料化した水のイメージには独特の性質があるとして、次のように述べるのである。

「しかしながら、水から生まれたある種の形相には、もっと魅力的で、もっと強力で、もっと堅固なものがある。それは、もっと質料的でもっと深い夢想がそこに介入してきているということであり、われわれの内なる存在がさらに奥底で関わるということであり、われわれの想像力が、ごく間近で、創造の作用を夢見るということなのだ。そのとき、反映のポエジーにおいては感じられることのなかった詩的な力が突如として現れるのである。水が重くなり、暗くなり、深くなる。水が質料化するのである。そしてこれこそが質料化する夢想なのであり、それは、水の夢をもっと緩慢でもっと官能的な夢想と結びつけるのである……。』(ER30)

ここでは、質料化した水より具体的な性質が語られている。水の質料的イメージは、魅力的で、われわれに強く迫ってくるものであり、中身の詰まったより堅固なものなのである(plus d'attraits, plus d'insistance, plus de consistance)。それは、重く、暗く、そして深いという性質を伴うものである。これは大地のイメージについて言われる性質と変わりのないものである。これに加えて、水の夢想はさらに官能性を帯びるとされているが、これについては後で触れよう。

したがって、バシュラールにとってナルシスムとは、まずは水における視覚的経験として位置づけられるものである。ナルシスムとは、水という物質における視覚的経験なのであり、それは感覚的経験としてまずは現れるものであるが、その後さらに官能的経験へと移行してゆく出来事なのである。またそれは自ずから深まる経験として観察されることであろう。さて、そうであるとすれば、ナルシスムにおいて感覚的価値はいかにして官能的価値へと深化してゆくのであろうか。

5. ナルシスムと自然

バシュラールは、まずナルシスムが鏡像経験であることに着目し、人工の鏡と水鏡とを対比しながら水鏡の意義を論じている。バシュラールによれば、ガラスや金属でできた人工の鏡は、「あまりにも文明的で、あまりにも便利で、あまりにも幾何学的な対象である。鏡は、夢想の道具としては、あまりにもあからさまにものを映すものであり、そのため夢想的生に相応しいものとはいえないのである。」(ER32)

これに対して、水面に映る像は鮮明さにおいて人工の鏡のそれに劣るものである。

「泉の鏡は、それゆえ、開かれた想像力の機会となるのである。幾分ぼんやりとして幾分色あせた反射像は、理想化をうながす。」(ER33)

この時、想像力が発動し、夢想が深まるということになる。これに関連して、バシュラールはマラルメの詩やローデンバックのプリュージュのイメージを援用しながら、いずれにおいてもそこでのイメージは水鏡に映じるものであるがゆえにわれわれの夢想を深く誘うものである。

このように人工の鏡と水鏡との違いは現象的には鏡像の鮮明さの違いであるが、さらにバシュラールは、それ以上のものを両者の違いに読みとっている。それが自然という要素である。人間の自己愛をナルシスムと呼ぶことについて、バシュラールは、それが単に神話にこと寄せるだけではなく、ナルシス神話が自然的なものであるということを含意するものであると解して、その重要性を強調している。つまりナルシスムにおいては、それが自然的経験であることに意味が見出されるのである (ER31)。

「人間が自分のイメージや、静かな水に映る自分の顔に対していただく愛情に対して、精神分析がナルシスという記号を当てたのは、単に解りやすい神話を必要としたということではなく、自然的経験 (des expériences naturelles) の心理的役割についての本当の洞察があったからこそである。」(ER31)

この文脈において水鏡の意味が捉えなおされることになる。すなわち水鏡は、われわれの姿をわれわれに見せるだけでなく、そのイメージを自然化するとされるのである。

「水鏡の心理学的有用性を理解しなければならない。すなわち水は、われわれの

イメージを自然化し (naturaliser)、われわれの内奥の瞑想が持つ傲りにいくぶんの無邪気さと自然さ (un peu d'innocence et de naturel) をもたらしために役立つのである。」(ER32)

またルイ・ラヴェルの著作からの一節を引用するに際しては、次のように述べている。

「ルイ・ラヴェルが注目したのは、水の反映の自然な深さ (la naturelle profondeur du reflet aquatique) と、その反映がもたらす際限のない夢である。」(ER32)

そして逆にガラスの鏡は、それが水鏡に例えられる時に初めて生気を帯びて自然なものとなるとみなされるのである。(ER33)

自然的なナルシシズムにおいてバシュラールが指摘するのは、それが「自然な夢の元素のひとつ」であり、「自然の中に自らを深く刻み込みたいという夢の欲求 (le besoin de s'inscrire profondément dans la nature)」だということである。そして人は、自然の元素としての水と共に夢想する時に、深く夢見ることができるとされるのである。(ER33)

自然に関しては、さらに、水のイメージが大地や火のイメージと比べられた時に、次のように言われているということも指摘しておこう。ここで大地や火のイメージと比べられている水のイメージは、春の陽光に輝く明るい水である。

「そのようなイメージは、たとえ自然なものであっても、われわれを魅了することはない。そのようなイメージが、われわれの中に深い感情を呼び覚ますことはない。それが、火や大地であれば、そのイメージが、同じように平凡であったとしても、深い感情を呼び覚ますことがあるのである。」(ER30)

ここで興味深いのは、「たとえ自然なものであっても (même naturelles)」という一句である。こうした文言からは、「自然的なもの」こそが本来われわれを魅了し、また深い感情を呼び覚ますものであるという前提が見てとれるであろう。

ナルシシズムにおける自然の重要性は、けっして偶然的なものではない。実は、バシュラールのナルシシズム論において、自然は必然的な契機として考えられているのである。ナルシシズムと自然との本質的連関がどのようなものであるのかについて次に検討しよう。

6. ナルシシズムの形而上学

ナルシシズムとは人間が自らの美しさを意識する経験であるが、バシュラールはこのようなナルシシズムを自我的ナルシシズム (le narcissisme égoïste) と呼び、ナルシシズムがそれに限定されるものではないとして、より拡張されたスケールの中でナルシシズムを論じる。バシュラールは、まずジョアシャン・ガスケの次のような言葉を引用する。

「世界は、自分自身について考えている巨大なナルシスである。」(ER36)

そこからさらにシェリーやキーツ、エリュアールといった詩人たちの詩句を引用しながら、

そこでのイメージが、自我的ナルシズムを超えて宇宙的ナルシズム (*le narcissisme cosmique*) に至っていることを指摘している。水鏡に映るのは、ナルシスの顔だけではない。ナルシスが覗き込む水の中には、森も大空も映っている。そして湖水に映った森や空は、それらもまたナルシスとみなされるのである。つまり人間存在のみならず、水に映るすべてのものがナルシスと化するのである。

「ナルシスと共に、ナルシスのために、まさしく森全体が自らを映しているのであり、まさしく空全体が大いなるイメージを意識しようとしているのである。」(ER36)

バシュラールは、宇宙的ナルシズムは自我的ナルシズムの延長上にあるとしているが、両者の関係についてはこう述べている。

「宇宙的ナルシズムは、・・・きわめて自然に自我的ナルシズムを継続している。「私は美しい、なぜなら自然が美しいからだ。自然は美しい、なぜなら私が美しいからだ。」このような対話が、創造的想像力とその自然におけるモデル (*ses modèles naturels*) の間で際限なく交わされている。普遍化されたナルシズム (*narcissisme généralisé*) は、あらゆる存在を花へと変身させる。そしてあらゆる花に自分が美しいということを意識させるのである。あらゆる花はナルシス化する (*se narcissent*)。そして水は、そのような花たちにとって、ナルシズムの素晴らしい道具 (*l'instrument merveilleux*) なのである。」(ER37)

この宇宙的ナルシズムにおいては、水に映った世界全体が関わっており、世界全体がその美を意識するのである。水は世界の美しさを顕示するものとしての役割を担う元素なのである。こうした主張は、散文的で常識的な観点からすれば、実に荒唐無稽なものではある。しかしこれは質料的想像力がもたらす一つの形而上学なのである。科学的認識論から排除された実体を求める質料的想像力の描く世界が形而上学的なものとなるのは、むしろ必然とも言えるべきではないだろうか。実際、バシュラール自身も、自我的ナルシズムと宇宙的ナルシズムの関係について、それが形而上学的性格のものであることを明言している。

「おそらく、自我的ナルシズムと宇宙的ナルシズムとの関係についてのこうした指摘は、もしわれわれがその形而上学的性格を強調するならば、よりいっそうしっかりしたものに見えるであろう。」(ER40)

ナルシズムの形而上学的特性はどのようなものか、もっと詳しく見ておこう。

ナルシズムとは、見るものが見られるものであり、見られるものが見るものであるという関係のことである。そこにバシュラールは意志の問題を介入させる。カントの美的観照における無関心性を想起するまでもなく、何かを観照するという行為は、世界に対する働きかけの中断であると解されるものである。バシュラールも、ショーペンハウアーを引きながら、美的観照が人間を意志のドラマから引き離すものであるという見方を一般論としている。しかし、そ

のような、美的観照態度を行為の中断と見なしたり、そこに無関心性を認めたりする西洋美学の伝統的立場に対して、バシュラールは、「観照する意志 (la volonté de contempler)」(ER41)を主張する。見るということを意志的行為としてバシュラールは捉えるのである。

ここからさらにバシュラールは、見ることへの意志が人間にのみ認められるものではなく自然においても認められると論を進めるのである。つまり世界そのものが自らを見たいという欲求と意志を持っているのであり、そのための目の役割を果たすのが、世界の姿をその面に映す水だと言うのである。

だが世界の目は水にとどまらない。これがナルシシズムとの関係において論じられていることから解るように、美しいものには目が備わっているものなのである。美しいものは、自らの美を見るために目を持っているのであり、それゆえ美しいものはわれわれを見つめるものでもあるのだ。バシュラールがその例として持ち出すのは、孔雀の尾羽にある目のような模様である。美しい孔雀の尾羽の模様がわれわれを見つめる目であるという表現は、単なる偶然を捉えた素朴な比喩として解釈するのが常識的観点というものであろうが、バシュラールの詩学はそのような立場に立つものではない。美しいものを見ている人は、美しいものが意志をもってこちらを見ているという感覚に陥るものであることをバシュラールは指摘するのである。

「その時、見ている者は、自分が、美の直接的意志の前にいるという感じ、受動的なままではいられない見せびらかそうとする力の前にいるという感じを持つのである。」(ER43)。

そうしてバシュラールは結論する。

「観照すること、それは意志に対立することではない。それは別の系統の意志に従うことであり、それは一般意志の一要素たる美の意志を分有することなのである。」(ER44)

そして、このようなイメージを理解するためには、「想像力は、形相の生と質料の生とを共に分有することが必要」(ER44) だとバシュラールは述べるのである。

またここで語られている美しいものとは、自然のことである。これはユゴーについての言及において表明している。ユゴーの作品の中には、宇宙的ナルシシズムと動的パンカリズム (pancalisme dynamique) との組み合わせが見られ、そこでは自然の方からわれわれにその美を観照するように迫ってくると言うのである。(ER44)

以上の考察を経て見えてくることは、人間が自らの美しさを見つめる自我的ナルシシズムにおいてバシュラールが自然の中の水鏡の優位性を主張しナルシシズムにおける自然の重要性をくりかえし指摘していたのは、その背後に宇宙論的ナルシシズムが想定されていたためだということである。

さて、水の表面的なイメージとしての始まったナルシシズムの話は、きわめて壮大な宇宙論

となり、形而上学としての姿を現したが、その理論の中で質料的イメージとしての水はどこに行っただろうか。これは水についての質料的イメージの話と言えるのだろうか。この点に関してバシュラールは答えている。

「しかし事物の眼差しに、どこか優しいところ、いくぶんの重々しさ、なにか物思うようなところがあるならば、それは水の眼差し (*un regard de l'eau*) である。想像力の検討によって、われわれは次のような逆説に辿りつく。すなわち、一般化された視覚 (*la vision généralisée*) の想像力においては、水は予期せぬ役割を演じるのである。大地の真の目、それは水である。われわれの目の中では、夢を見るのは水なのだ。われわれの目とは、「神がわれわれ自身の奥底に設置した、液体となった光が溜まった誰も知らない池」なのではないだろうか。自然の中でも、見るものはまたもや水なのであり、夢見るものもまた水なのだ。」(ER45)

バシュラールは、自然がわれわれを見る眼差しは水の眼差しだと言うのである。つまり宇宙的ナルシスムにおいては、質料的イメージとしての水こそが眼差しの本体をなしているのであり、ナルシスムはすべて水のイメージを分有していると解されるのである。

宇宙的ナルシスムと自我的ナルシスムは、議論の順序としては自我的ナルシスムが先行し、その延長上に宇宙的ナルシスムが現れてくるのであるが、存在論的には宇宙的ナルシスムこそが先行するものなのである。つまり自然そのもののナルシスムが存在するがゆえに人間のナルシスムが可能になっているのである。バシュラールにおいては、世界が世界を見るというのがナルシスムの形而上学的本質であって、人間が自分を見るということは、宇宙的ナルシスムに対して種的な一例として位置づけられるのである。そして水という物質＝質料は、そうした宇宙的ナルシスムを可能にするエレメントとして想定されているのである。

7. 新鮮さと水の声

ナルシスムについての以上のような形而上学を語った後、バシュラールは春の水の新鮮さや水の流れが立てる音について短い節を当てている。これらは、いずれも水の表面的イメージである。そして、それらは同時に水における非視覚的なイメージの例となっている。新鮮さ、爽やかさにおいて、われわれはバシュラールが質料的イメージにおいて強調する照応を理解するであろう。

ここでバシュラールは、質料的想像力の理解に資するコメントを発している。バシュラールによれば、フランス語の春の形容詞形、*printanier* に結びつく名詞としては「水」以上のものはないと言う。そしてフランス人の耳には「春の水 (*eaux printanière*)」という言葉以上に爽やかな言葉はないと言うのである。

「形容詞というのはいずれも、このように、その特権的な名詞を持っており、

質料的想像力はそれをすぐさま捉える。爽やかさは、かくして、水の形容詞なのである。水は、こうした点で、実体化した爽やかさなのである。」(ER46)

バシュラールのこの指摘の中でわれわれにとって重要なことは、その真偽ではない。実際、日本語の「さわやか」という語がすぐさま呼び起こすのは、春よりもむしろ秋であろうし、それ以上に朝であろう。また水よりも風と結びつくとも言えるかもしれない。重要なことは、そのように、形容詞とそれが修飾する名詞の間に特権的な繋がりを持つものがあるということである。バシュラールにおいては、それが爽やかさと水の関係なのである。こうした水の爽やかさについてのトピックは水の官能的価値についての補完的な説明ともなる。

「官能的価値—それはもう感覚ではない—は、実体に密着していて、違えようもない照応をもたらすのである。かくして牧草地のような緑の香りは明らかに爽やかな香りなのである。それは爽やかでつややかな肉身であり、子供の肉身のように充実した肉身なのだ。あらゆる照応を支えているものは、原初的な水であり、肉感的な水であり、普遍的要素なのである。」(ER46)

また水が発する音についても、それが爽やかで明るいということから、表面的な水のイメージとして言及されている。これも非視覚的なイメージであり、水における官能的価値を表すものとして理解してよいであろう。だがそれ以上に注目すべきことは、ここでもまた、流れる水の音が「自然」と関係づけられているということである。バシュラールによれば、小川が立てる水音は、大文字で書かれる自然の幼児言語なのである。幼児となった大文字の自然が話す言葉が川のせせらぎなのである (ER47)。水はここでも自然との媒介者として位置づけられているのであり、自然の声をわれわれに伝えるものなのである。

8. 水浴する女性と白鳥

水の表面のイメージすなわち形相的イメージとしてバシュラールが第1章の後半をあてて論じるのが白鳥である。白鳥が水の表面的イメージとされるのは、単に白鳥が水上に集う水鳥だからというわけではない。白鳥がこの文脈において、すなわち水のイメージとして取り上げられることに、われわれはいささか強引な印象を受けないではない。たしかに白鳥は水上に集う鳥であるが、だからといってそれをただちに水のイメージとして分類するということは自然なこととは思えないからである。これについては、少し細部を掘り下げてみる必要がある。

バシュラールの理論において白鳥は、最終的には水の質料的イメージとみなされ、質料的想像力と繋がるものなのであるが、白鳥と水の表面的イメージとの間には両者を繋ぐリンクとなる一項がある。それが水浴する裸婦である。

「それでは、小川の性的機能とは何であろうか。それは女性の裸体を喚起することである。散歩している人が言う。これはとても澄んだ水だ。このような

水ならば、最も美しいイメージをどれほど忠実に映し出すことであろうか、と。その結果、そこで水浴する女性は、色白で若くなるであろう。その結果、彼女は裸婦となるであろう。さらに、水が喚起する裸は、自然な裸 (la nudité naturelle) である。それは純潔を守り続けられる裸なのである。想像力の領分において、真実に裸の存在、体毛のない曲線をもった裸の存在は、常に海から出てくるものである。水から出てくる存在とは、反映なのであり、その反映が少しずつ質料化したものなのである。それは、存在となる前はイメージであり、イメージとなる前は欲望なのである。』(ER49)

つまりルネサンス以降の西洋絵画において描かれ続けてきた水浴する女性、これは清らかな水が喚起するイメージなのである。美しいナルシスが水面の鏡に映し出されるように、澄んだ水の表面には、無意識の欲望に促された想像力が水浴する女性のイメージを描くというのである。そしてこのような前提の下で、水辺の白鳥は、水浴する女性の代役として意味づけられるのである。

白鳥は、したがって、無意識の欲望と結びついている。白鳥は、表面的イメージとしては、きわめて視覚的なものであるが、それは欲望と深く結びついたものであるがゆえに、視覚対象という意味での感覚的存在ではなく官能的存在とみなすべきものである。このような論理によって、白鳥においては、表面的イメージと質料的想像力との関係が想定されることになるのである。そこから展開される論理は、ナルシスムにおいて展開された眼差しの形而上学、すなわち水の形而上学とパラレルな様を示すものである。その論の詳細についてここで論じる余裕はないが、白鳥のイメージもまた、水の表面的イメージでありながら、水の質料的イメージを分有するがゆえにその詩的な力を獲得しているとバシュラールがみなしていることは指摘しておきたいところである。

9. おわりに

『水と夢』における水の表面的イメージから深層的イメージへの移行の議論に注目することによって、われわれはバシュラールの質料的想像力論における二つの論点を指摘することができる。

一つは、元素としての水の形而上学的性格である。ナルシスムにおける質料的イメージは、水の宇宙論的イメージを示すものであり、水は、自然そのものが自らを見るための目としてイメージされていた。水はその表面に美しい自然を映すものであるが、その映像は、質料的想像力にとっては、単に表面的なものではなく、美しい自然が自らを見せまた見ようとする意志を表すものであり、水はそのための器官なのである。バシュラールの質料的想像力が生み出す水のイメージは、そのような形而上学的存在なのであり、その意味においてこそ元素 (エレメン

ト)と呼ぶべきものなのである。そのような元素としての水の形而上学的性格こそがバシュラールの質料的イメージないし質料的想像力の根本をなしているものであり、それを考慮しないでは質料的想像力の意味するところは十全に理解することはできないと思われる。

またその一方で、バシュラールの質料的イメージがイメージにおける非視覚的側面に着目したものであることも重要な論点である。質料的想像力によってもたらされるイメージは、視覚に限定された感覚的なものではなく、身体全体に影響を及ぼすイメージなのである。水の表面的イメージとして数えられる水の爽やかさも水のせせらぎもそうした文脈の中で理解されるべきものである。ナルシスム論や白鳥論においてバシュラールはそのイメージを官能的 (*sensuel*) としているが、これらも非視覚的な身体全体の感性的経験として解釈すべきものであろう。質料的イメージとは、この身体感覚的な経験に訴えるものであり、『水と夢』における質料的想像力という主題の下での詩的イメージの議論とは、非視覚的イメージの詩的価値を評価する試みとして位置づけられるべきものである。

注

- 1) BACHELARD, Gaston, *L'eau et les rêves*, Paris : Librairie José Corti, 1942.

同書からの引用および参照については、すべて略号 ER に頁数を付記して、引用文末および本文中に記す。訳文はすべて拙訳である。

- 2) 金森修, 『バシュラール 科学と詩』(現代思想の冒険者たち 5), 講談社, 1996, p. 179.

- 3) 青柳晃一, 「ガストン・バシュラールにおける「物質的想像力」の概念」, 『比較文学研究』第8号, 1964, p. 106.

- 4) 及川馥, 「訳者あとがき」, ガストン・バシュラール, 及川馥訳, 『水と夢』, 東京, 法政大学出版局, 2008, p. 392.

- 5) 北村知之, 「物質的想像力と認識論的障害」, 『福井県立大学論集』第24号, 2004年7月, pp. 1-16.

- 6) BACHELARD, Gaston, *La formation de l'esprit scientifique*, 1 ed., Paris : Librairie Philosophique J.Vrin, 1938 (rep.1993).

ガストン・バシュラール, 及川馥・小井戸光彦訳, 『科学的精神の形成』, 国文社, 1975.

- 7) 北村知之, op. cit., p.11.

- 8) 及川馥, 『バシュラールの詩学』, 東京, 法政大学出版局, 1989, p. 140.